

アメリカ東部の湿地性植物を訪ねて

太田 道人

富山市科学文化センター 富山市西中野町 1-8-31 〒939-8084

Trip to Some Wetlands in North-Eastern America

Michihito Ohta : Toyama Science Museum

はじめに

未知の植物に出会うことは、私にとってはこの上ない頭の刺激になる。大きな標本庫で亜熱帯や熱帯の標本を見るとぞくぞくするような興奮を覚えるし、ひとたび海外に出れば、アスファルトに出た雑草だろうが畑の草だろうが、出会う植物はなんでも面白くてしかたがない。知らない植物に出会うたびに、日本の植物との形態的、生態的共通性や異質性について考えることで満足感を味わえる(往々、自分で勝手に納得しているだけであるが)。

1999年8月、筆者はアメリカのセントルイスで開かれた国際植物学会議(IBC'99)に参加する機会を得たので、そのエクスカージョンにも出席しミシシッピ川氾濫原の植生を観察した。また、それに先だって首都ワシントンに近いバージニア州ポトマック川河口部の湿地も再訪し、植生をよく観察することができた。本稿ではこれら2カ所の湿地の植物についてレポートする。



■バージニア州アカクワン・ベイ・野生生物保護区

アカクワン・ベイ・野生生物保護区は、ポトマック川の河口部に広がる低湿地の一部で、かつては、米陸軍の弾薬庫などの軍事施設があった場所である。現在は広大な湿地と草地を野生生物保護区とし、国がレンジャーを置いて管理している。保護区は金網で囲まれており、許可なく立ち入ることは出来ないが、生物調査や観察であれば、事前申し込みで比較的簡単に入ることができるようである。保護区の植生は、比較的平坦な陸地と河口部の低湿地からなる。陸地の大部分は、長期にわたって定期的に刈られていたために牧草地のような草地と一部に残されたナラ・カエデの林になっている。低湿地には、ミズアオイ類をはじめとする抽水植物群落や、夏を除く季節には根元が水に浸かるヤナギ類の林がある(図1)。この水辺にはビーバーも棲んでいる。



図1. バージニア州アカクワン・ベイ野生生物保護区の水辺景観



図2. 観察の様子。右がアレイン・ホウグさん。他の二人はチョウ観察に来ていた人たち。
 図3. ミズアオイの仲間 *Pontederia cordata*の花。英名Pickerel Weed。
 図4. 湿地に生えるフヨウの仲間 *Hibiscus palustris*の花。英名Swamp Rose Mallow。

現地を案内してくれたのは、2年前スミソニアン国立自然史博物館での研修中に知り合ったアレインさん(図2)。アレインは、スミソニアン国立植物標本庫で、標本の状態チェックとデータをデータベースへ入力する仕事をしている、推定50代の女性である。部屋の入り口には、かわいい孫の写真が2枚貼ってある。前回会ったときには1枚であったから、今回再会したときには、早速二人目の孫を写真で紹介された。

アレインは、かつて行った保護区の植生調査を基に、今はその活用方法について考えているのだという。

私が初めてここを訪れたのは1998年の2月。この時もアレインが連れてきてくれた。季節は真冬で、樹木の葉は落葉し、草もほとんどなかったが、目の前でノスリがネズミを捕らえて食べる様子を観察できたり、ハヤブサやハゲタカ類(Vulture)も上空を飛ぶなど、冬は野鳥観察にはよいフィールドであった。ここは自然が豊かな



図5. ピンク色の花が可愛い抽水植物 *Sabatia dodecandra*。英名Large Marsh Pink。
 図6. ヤナギの亜高木からなる湿性林。林床は夏を除き水浸しになることがある。ミズアオイ類とハンゲショウ類が生える。
 図7. ハンゲショウの仲間 *Saurulus cernuus*。英名Lizards Tail(トカゲのしっぽ)。



図8. トウワタの仲間 *Asclepias incarnata*。英名Swamp Milkweed
 図9. トケイソウの仲間の *Passiflora lutea*。英名Yellow Passionflower。
 図10. フェンスにからんだノウゼンカズラの仲間 *Campsis radicans*。英名Trumpet Creeper(トランペットカズラ)。

日本の河口付近の湾土植生とえば、ヨシやマコモが繁茂するものであるが、ここにはない。

陸地の草地は、イネ科のカモノハシを巨大化させたような植物(*Tripsicum dactyloides*)が優占しており、これに混じって日本ではお目にかかれない大型のトウワタ類(*Asclepias incarnata*, 図8)をはじめ、バーベナ類(*Verbena hastata*)、アサガオ類(*Convolvulus sepium*)、モンキーフラワー(*Mimulus rigens*)、イグサ(*Juncus effusus*)などが生えている。また、フェンスに絡む植物には結構日本産のものが入っている。米在来の小型のキバナトケイソウ(*Passiflora lutea*, 図9)、ノウゼンカズラ類(*Campsis radicans*, 図10)、アメリカホドイモ(*Apios americana*)、アメリカヤブガラシ(*Parthenocissus quinquefolia*)などに混じって、日本から帰化したスイカズラ(*Lonicera japonica*)やセンニンソウ(*Clematis terniflora*)

も少なからぬ面積を占めている。フェンス下には日本から入ったイタドリ(*Polygonum cuspidatum*)やヨシ類(*Phragmites australis*)も見られる。管理車道沿いにはメドハギ類(*Lespedeza striata*, 図11)が帰化して広がり始めており、除去が検討されていた。そのメドハギは、英名でCommon lespedezaあるいはJapanese lespedezaと呼ばれており、日本からの帰化植物だぞといわれて驚いた。しかし、姿がどうも違うので調べてみたところ *Lespedeza striata* は、日本に産する植物ではなく、アメリカ国内ではどこかの地域からの帰化植物あるいは栽培植物として扱われ、火災跡のオープンスペースにはよく生育する植物であることが分かった。日本からの帰化というのは濡れ衣である。路傍には、世界に広く分布するコニシキソウやシロバナシナガワハギ、イヌホウズキなどお馴染みのコスモポリタンも生育していた。



図11. メドハギに非常によく似た *Lespedeza striata*。英名はJapanese Cloverだが日本産の種ではない。

さて、観察も一段落しアレインが用意した冷たいジュースと大量の水の休憩を終え、帰路に着くためにアレインの愛車(大型のピュイック)に乗った私たちは、ちょっとしたハプニングに見舞われることになる。アレインは車を前に向かって発進させようと努力するが、どうもこれができないのである。曰く、「ギアがバックにしか入らず、おまけにエンジンが止まらなくなったわ」というのである。「しかたがない、ゲートまでバックで帰ろう」。われわれは、約2kmのたんぼ道をひたすらバックで帰ることになったのである。きょう見た植物を、それこそテープを巻き戻すかのように

後退しながら見直したのは、初めての経験である。不思議な気持ちであった。ゲートでちょうど施設の補修工事に来ている青年作業員が、異常な動きをする我々の車に気づき、親切にも連絡用に携帯電話を貸してくれた上に、救援が来るまでの間、冷房付きの作業小屋を使わせてくれた。これはありがたかった。約一時間後、アレインは車ごと修理工場へ行ってしまい、私は帰りの足を失ってしまったのだが、しばらくするとアレインに頼まれた友達のジョー（このレンジャーである）が来て、最寄りの駅までちゃんと送ってくれた。さらにジョーが来るまでの間は、別のレンジャーが私の相手をしにきてくれるなど、みんな友達甲斐のある人たちである。

ホテルに帰ると、腰から下が妙にかゆい。見ると、蚊に刺されたような跡が腰の周りや膝の周りに30〜40個もできていた。横っ腹の一つは特別に大きく腫れている。ダニに食われていたのだ。夕方、アレインもくるぶしのあたりを数カ所咬まれていたようだが、その時はめざとく見つけて、3mmほどのダニを指でつぶしていた。長ズボンと長靴を履いていた私は大丈夫と思っていたが、甘かった。このかゆみは、その後10日間程続いた。はじめて体内に入る種類の抗原には、体が強く反応してしまうのだろうか。

■ミズーリ州セントルイス、ミシシッピ川河川敷

アメリカ西部開拓のフロンティア・スピリット



図12. セントルイス北部を蛇行して流れるミシシッピ川。流れに沿って河畔林と自然草地（プレーリー）があり、堤外には広大な農地が広がる。

はここから始まったという。ミズーリ州セントルイスは、ミシシッピ川（図12）河畔に広がる大工業都市である（図13）。広大なミシシッピ川は舟運が盛んであるが、時々増水しては、河川敷あるいは広大な農地を水浸しにする。1993年7月の大洪水は記憶に新しい。飛行機の窓から見ても、陸地に水が流れた跡と見られる曲線が見えるほどだ。洪水を調節して被害を最小限に食い止め、船の安定航行を確保することは永遠の命題で、本川には数多くのダムと運河が設けられてきた。

この氾濫原を観察する日帰りツアーが、国際植物学会議終了後のオプションに設定されていたので参加した。氾濫原とは、堤防から川の水面までの間に広がる低水敷および高水敷をさしている。蛇行している川の内側には広大な砂泥の堆積地が生じるので、ヤナギ群落、ニオセアカシア群落、イネ科植物草原などがモザイク状に分布している。水に浸かってからの回復時間や微妙な土地の高低差によって群落が決まるらしい。

最初に訪れたところは、ミシシッピ川とミズーリ川の合流点右岸側の高水敷、コロンビアボトム保護区（図14）である。土地はミズーリ州自然保護部が買い取って、都市に隣接した自然保護区として管理している。ただ保護区とは言っても、釣りやボート、制限付きで狩猟もできる場所である。参加者約20名を案内してくれたのは、ミズーリ植物園のジョージとマイク。日本人は私の他に、神戸大学の角野教授と京都大学の永益助教授がい

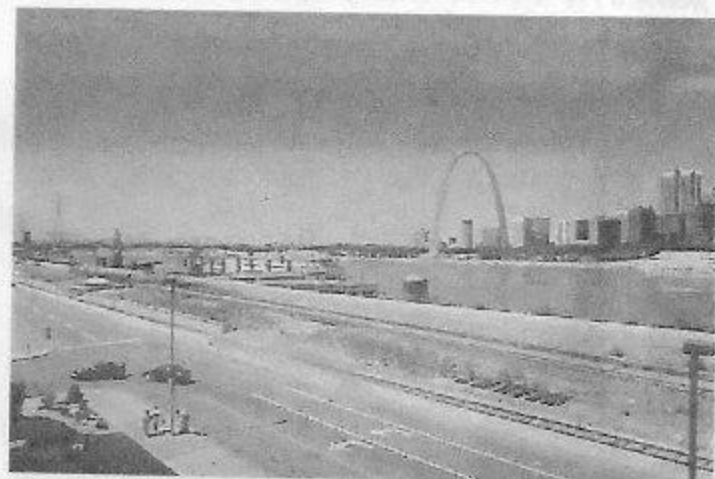


図13. ミシシッピ川とセントルイス市街。西部開拓のシンボル、ゲートウェイアーチが見える。



図14. コロンビアボトム自然保護区のヤナギを主とする植生。



図15. イネ科草原に点在するトウワタの仲間（*Asclepias syriaca*）。英名 Common Milkweed。

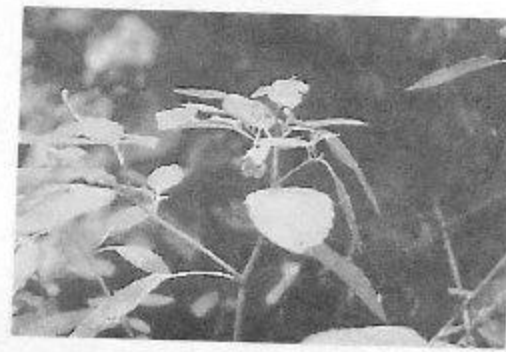


図16. ヤナギ群落内の湿性に生えていた橙色の花をつけるツリフネソウ（*Impatiens capensis*）。英名 Spotted Touch-me-not。

た。スイス・チューリッヒ植物園のロルフさんは、ツアー中だれにでも親しそうに話しかけて楽しい雰囲気を作っている。共通語は英語であっても、スイス系、ドイツ系、フランス系、日本系などが混在し、なんとも国際色豊かな一行である。名前がわからない植物は、ジョージに聞けば即座に学名で答えが帰ってくる。

畑の土のように細かな砂が新たに堆積した場所には、オオアレチノギクやヒメムカシヨモギ、ヒメジョオンなどの3種が群落を作っている。これと全く同じ構成の群落が日本にもそのまま帰化していることを思うとぞっとする。隣接した草地にはセイバンモロコシに似たイネ科植物が優占し、ガガイモ科のオトウワタ（*Asclepias striata*, 図15）や別のトウワタ類（*A. purpurascens*）、バーベナ類が点在している。花は咲いていなかったが、セイトカアワダチソウ類が数種少なからず生育していた。ここが日本の秋の河川敷を黄色に変えたセイトカアワダチソウの原産地の一つなのだろうか。ヤナギ群落の中には、イラクサ科の植物にまじって、だいたい色の美しいツリフネソウ（*Impatiens capensis*, 図16）が人目を引く。ニオセアカシアの林床には、ここでも全く他の植物が生えていない。

2ヶ所目の訪問地は、ミシシッピ川を少し上流に遡ったメルビン・プライス・ダム上部に広がる湿性地である。ここは、セントルイス地区米陸軍

技術部隊（US Army Corps of Engineers）によって、洪水調節、発電、水源確保、リクリエーション機能の整備、野生生物保護など、リバーズ・プロジェクトと名付けられた総合的な河川管理が行われている地域である。ミシシッピ川の流れに沿った421km²の開発と安全管理と自然環境保護が一つの組織内で行われているのが特徴だ。特にダムサイトの一部とこれに続く農地（あわせて4.6km²）を、生物相豊かな水辺とプレーリーに還元しつつあり、これを「生態系展示エリア」として2名のレンジャーが管理している。彼らはビジターセンターに常駐し、自然環境の大切さを呼びかける普及教育活動を盛んに行っており、われわれが訪ねたときも熱



図17. ミシシッピ川メルビン・プライス・ダム上部に設定された生態系展示エリアでは、レンジャーが熱心に説明してくれた。

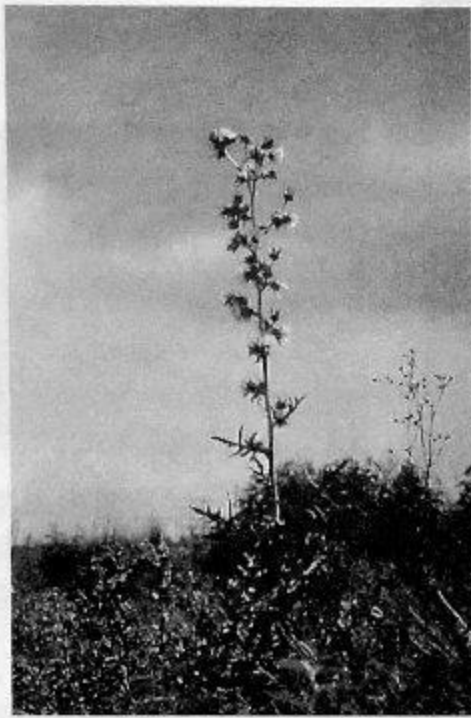


図18. プレーリーに生えていたヒマワリ属の一種 *Helianthus* sp.。

心に説明してくれた(図17)。生態系展示エリアとその周辺には、ハクトウワシやハヤブサをはじめ多くの猛禽類が飛来するが、それは全管理区域内の環境の質も高く保たれているからであることを強調していた。

生態系展示エリア内のススキ草原思わせるやや乾燥した自然草原の中は、意外にも植物が多様で、野生のヒマワリ (*Helianthus grosseserratus*, *H. lasinatum* など、図18)が4種、紫色の野ギク (*Aster novae-angliae* など)が2~3種、ルピナスに似て巨大な果実をつけるマメ科の植物 (*Baptisia leucantha*)、セイタカアワダチソウ類、姿がリュウゼツランを思わせるセリ科の

Eryngium yuccifolium、オジギソウとよく似た *Desmanthus illinoensis* など、一種ずつ写しているとフィルムがあつというまに無くなってしまふほどだ。

クリークには今は水がないために湿地状になっており、ミズキンバイ属の植物 (*Ludwigia alternifolia*) が一面に群生していたり、オモダカ科で日本にはない属の *Echinodorus* などを見ることができた。水草が専門の角野先生もご機嫌だ。水位の変動による攪乱の著しい川岸近くには、ヤハズソウに近縁で直径2cmの大型花をつける *Cassia fasciculata* が生えている。蛇足だが、この草原においてもダニの再襲来を受けたことは、いまさら言うまでもない。ここプレーリーの草原や河川敷の湿地をざっと観察して出合った植物のほとんどは、科あるいは属レベルで日本の植物と共通していることが改めて認識できた。

今回訪れた環境はレベルの差こそあれ、どれも広い面積が一括して保護区に設定されている。その場所は、人間がかつてそこにあった自然を一度破壊したか、それに近い状態にしてしまったものだが、遊休地化したその土地には現在、植生が復元し多くの野生動物が戻りつつある。私の見た限り、保護区の生態系の複雑さは、私たちの郷土の自然豊かな環境のものと同程度である。ただ、生態系の面積と連続性には歴然とした違いがあった。保護区に短時間いただけでたくさんの猛禽類が見られたという事実は、保全される生態系は大きければ大きいほどいいのだと、無条件に分からせてくれたのだ。

平成12年度生物関係 特別展のご案内

富山市科学文化センター

特集展示「収蔵品が語る富山の自然」

期間：4月22日(土)～5月28日(日)

富山市科学文化センターが二〇年余をかけて収集した富山に関連する貴重な資料を展示し、富山の自然を紹介します。

特別展示「これが富山の自然だ」

期間：10月8日(日)～10月31日(火)

(一部は9月1日から)

2000年とやま国体が開催されるのを機に富山市科学文化センター収蔵の標本や資料で富山の自然を紹介します。

お問い合わせ先：富山市科学文化センター

TEL：076-491-2123 FAX：076-421-5950

ホームページ

<http://www.tsm.toyama.toyama.jp/>

魚津水族館

「ホタルイカの展示」

期間：3月中旬～5月31日(水)

ホタルイカの腕先の発光を観察する暗水槽と、スポットライトで全身を照らし出す明水槽の2つの水槽でホタルイカを展示します。また、この期間中の日曜日と祝日には、学芸員によるホタルイカの解説と、ホタルイカの全身発光を観察する「ホタルイカの発光実験」を行います。

春の特別展「水中の忍者たち」

期間：3月20日(月)～5月31日(水)

動物が獲物を捕らえるためや、身を守るために体の色や形などをまわりのものや動植物に似せることを擬態といいます。擬態は、昆虫の世界ではよく知られていますが、水中に棲む生き物たちも例外ではありません。この特別展では、水に棲む生き物に見られる擬態をさまざまな角度から紹介します。

夏の特別展「知られざる富山湾—深海—」

期間：7月20日(木)～11月5日(日)

私たちの目の前に広がる富山湾は、日本有数の深い湾です。いつどのようにこのような深い湾が形成されたのでしょうか？富山湾の深海は、どのような世界でしょうか？この特別展では、最も身近な富山湾の深海の世界を、近年の研究成果をもとに紹介するものです。また、体験コーナーで、深海の世界の一端に触れてください。

お問い合わせ先：魚津水族館

TEL：0765-24-4100 FAX：0765-24-4128

ホームページ

<http://www.city.uozu.toyama.jp/suizoku/>

富山県中央植物園

特別展示「野生ラン展」

期間：5月12日(金)～5月14日(日)

富山県蘭協会との共催により、ランの野生種と園芸品種約250点を展示します。

特別展示「食虫植物展」

期間：8月25日(金)～8月30日(水)

ハエトリグサやウツボカズラなど姿や動きのおもしろい食虫植物を展示します。

特別展示「タバコとはどんな植物か(仮題)」

期間：9月1日(金)～9月27日(水)

人間の文化と深く結び付き、バイオテクノロジーの発展を支えたモデル植物タバコの知られざる世界を紹介します。

お問い合わせ先：富山県中央植物園

TEL：076-466-4187 FAX：076-465-5923